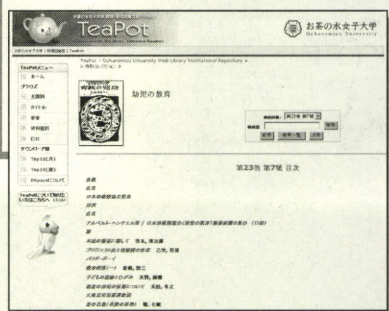


## ▶『幼児の教育』ネット公開に寄せて (18)

### 半世紀前の記事を読んで — 大学院生によるレポート —

児玉理紗

金子未希



お茶の水女子大学附属図書館のWEB サイト  
内の「お茶の水女子大学教育・研究成果コレ  
クション (略称 TeaPot)」にてバックナン  
バーインターネット公開中。  
URL : <http://teapot.lib.ocha.ac.jp/ocha/>

いま、『幼児の教育』誌バックナンバーの内容が、お茶の

水女子大学 (以下、お茶大) 附属図書館HP上で、古いもの  
から順次公開されている。最近の情報データ更新によって、

一九五四 (昭和二十九) 年〜二〇〇七 (平成十九) 年のもの  
が新たに検索可能な状態となった。この部分を、お茶大大学  
院の保育学ゼミで、三年ごとに担当部分を区切って学生にレ  
ポートしてもらった。その時の資料をもとに、半世紀ほど前  
の本誌に掲載されていた記事への所感を、二人の学生が報告  
する。

(お茶大 浜口順子)

#### ▼人と人をつなぐ歴史

― 昭和二十九年〜三十一年の『幼児の教育』 ―

大学院の授業で『幼児の教育』の古い時代のものに  
触れる機会があり、私は一九五四 (昭和二十九) 年〜  
一九五六 (昭和三十一年) 年を担当し紹介することとな  
りました。五十年以上前の記事でありましたが、幼稚  
園と保育所の一元化、幼稚園と小学校の連携、幼稚園  
の学校化など、背負っている背景は違えども、現在と  
同じような問題が描かれており、時代が変化しても変



わらず抱え続けている問題もあるということに改めて気づかされました。

少し時代をさかのぼると、昭和二十二年、「教育基本法」「学校教育法」「児童福祉法」が公布され、学校教育の中に幼稚園が位置付けられました。さらに翌年の昭和二十三年には「保育要領」が発行され、保育界にとっては記念すべき年代でありました。このことは昭和二十二年に、「保育界にとって記念すべき昭和二十二年」の中で倉橋惣三が次のように語っています。

昭和二十二年の保育界は、花の春を迎える準備が出来たのである。……われわれひとりひとりが、自分の中に、この年を記念する年たらしめることである。極く小さくていい、人にみえなくていい、真に自分のものとしての小さい保育の記念塔を、各自の決意なり、着手なり、努力なりの中に立てることである。(第四十六巻第十号 p. 21 p. 4)

倉橋惣三がいかに力を尽くし、そしてこの時代が保育界にとってどれほど大きな意味をもっているのかを

感じ取ることができます。

また、昭和三十一年には初めての「幼稚園教育要領」が刊行されたことから、幼稚園に対する理解が深まり、信頼を得てきた時代であったことが推測されます。

一方で、昭和二十九年には和田實、翌年の昭和三十年には倉橋惣三がこの世を去り、幼児教育を支えてきた人物を失ったことも幼児教育界にとっては大きな出来事であったように思います。幼稚園が普及し幼児教育が一般に理解されてきた中、今後の幼児教育はどのような方向に進むべきかという重要な転換期に立ち、現場の保育者や研究者の幼児教育に対する熱い思いが感じられる時代でありました。

「幼稚園ブームが終わる」という見出しで世間が騒ぎ始めたのもこの時代のことでした。大都市ではすでに幼稚園が飽和した状態となり、入園者を増やすための激しい争奪戦が演じられる地域もあり、幼稚園の将来を悲観する関係者も出てきました。しかし、坂元彦太郎は「幼児教育の『危機』」の中で、このような事態は



幼児教育のやり方が間違っていたからではないと語っています。

このごろの幼児教育の方向ややり方がまちがっていたために、こんな結果になったのだ、という見方は原則としては当たらないと私は固く信じている。……これを機会として、一層園の教育を質的に向上させる努力がなければならないとともに、この機を利用して幼児教育の振興をはかる積極的な対策がうちたてられ、熱心な運動がはじめられなければならない。……そして、私は、このことが日本の幼児教育の一段の飛躍的な進展をもたらすものであることを固く信ずる。(第五十五巻第六号 p. 3—p. 6)

このことから、幼稚園が一般に普及してきたゆえに、幼稚園は本来に必要なのかという厳しい目を向けられていたことがうかがえます。そのような現実の中、幼児教育の関係者は自らが進んできた道を省み、これからのことを思い、必死に保育界を守ろうという気概をもっていたことが強く感じられます。坂元彦太郎も

その一人だったように思います。

これらの『幼児の教育』の古い記事を読んでいた時、私は実習先の幼稚園で、学生時代に坂元彦太郎に教わっていたという保育者と出会いました。坂元彦太郎は「学校教育法」の草案をつくり、「保育要領」や「幼稚園教育要領」の作成に携わるなど幼児教育の発展に尽力した人物であり、『幼児の教育』にも多くの記事を残しています。折しも『幼児の教育』の中の坂元彦太郎の記事を読んでいた私は、不思議な感覚を覚えながら、その保育者から坂元彦太郎の話をお聞きしました。私が担当した昭和二十九年～三十一年よりも後の時代のことですが、これから保育者になろうとしている学生に対する坂元彦太郎の思いや、倉橋惣三の思いを大事にした保育の話聞くことができました。このことを契機に、私はその保育者といままで以上に保育や子どもの話を重ねるようになりました。私が今回目にした記事は私の知らない時代のものでしたが、その記事を通して、いま現在新しく人とつながること



ができたと感じました。歴史は現在までにつくられてきた過去のもですが、過去がいまにつながり人と人をつなぎ付けるということを、その保育者との出会いから実感した出来事でありました。

発行されてから二年以上経った『幼児の教育』の全ての記事がネット上に公開されることは、百年以上続く保育者や研究者の思いが、いまの時代に一本の糸でつながったような思いがしています。

(児玉 お茶太大学院)

### ▼昔といまを照らし合わせて

―昭和三十三年～三十四年の『幼児の教育』―

私が担当した一九五七（昭和三十二年）年～一九五九（昭和三十四）年の『幼児の教育』についてご紹介します。この三年間はスプートニク・ショック<sup>注</sup>の影響を受け、日本においても小・中学校における学校教育の充実が図られ、それに付随して幼児教育に対する世間からの要請も、学習・教育的な色合いが強くなってい

たと考えられている時代です。その中で、幼児教育にかかわる人々の関心はどのようなことに集まっていたのでしょうか。昭和三十三年から三十四年の『幼児の教育』に書かれた記事と、最近のものとを比較して明らかにしたいと思います。

この時代の記事には、題名に「指導」という言葉が使われたものが多くあります。現代でも「指導」という言葉はもちろん使いますが、『幼児の教育』の記事の題名として使われることはほとんどありません。その理由の一つには「指導」という言葉の語感の強さが挙げられると思います。子どもの力を信じ、主体性を重んじることをよしとする現代においては、「指導」という言葉を使うことで保育が誤解されてしまうのではないかという危惧があり、使用がためらわれるのではないのでしょうか。またこの時代には、「保育効果」や「知能」という言葉も頻繁に使われており、「保育効果」については第五十七巻（昭和三十三年）で特集が、「知能」については第五十五巻から第五十六巻に



わたって十四回の連載が生まれ、関心の高さがうかがえます。その背景には、世間からの期待があったと考えられます。前述したようにスプートニク・ショックの影響を受けていたこの時代において、世間の人々が幼児教育に対して、子どもの「知能」を向上させることや、「保育効果」を上げることが期待しており、それが『幼児の教育』の記事にも反映されていたとしてもおかしくありません。これらの言葉が現在と同じような意味で使われているのかなど、まだまだ検討の余地はありますが、このころの幼児教育界は現代とは異なった状況にあり、人々の関心もいまとは違っていたということはいえそうです。

昭和三十二年から三十四年の『幼児の教育』の中には、「保育者とはこうあるべきだ」といった研究者・現場の保育者からの提言が書かれた記事も多くあります。西本脩は、第五十六巻第三号から第六号にわたって「理想の保育者の資質について」というテーマで連載をしています。そこで西本は、①外的条件（身体・

外貌・言語等）、②内的条件（能力・学識的条件、人格・性格的条件）、③指導（保育態度）的条件、④その他の条件という四つについて、理想的保育者の資質とはどのようなものか述べています。その内容は、ほとんどが現代に通じるもので目新しいことではないのですが、現代ではあえて書かれないようなことが述べられていて、興味深いものです。たとえば②内的条件（能力・学識的条件）では、保育者には「円満な常識をもちものが良いこと」が必要だとし、子どもだけでなく、家庭との連携を取り保育効果を上げるためにも「保育者が常識のある、話のわかる、いわゆる話せる人でなくてはなりません」と述べています。このような資質は、モンスターペアレントの問題などが深刻な現代にこそ保育者に求められていることかもしれないませんが、当たり前のことと考えられているからか、明記されることはあまりなく、こうして読んでみると「確かに大切なことだ」と改めて気づかされます。

そもそも、現代の『幼児の教育』において、「理想



の保育者とは」ということをテーマに記事が書かれること自体ほとんどありません。それは、これまでの多くの議論を経て「保育者とはこういうものだ」というイメージや意識がすでに広まっており、あえて書く必要がないからかもしれませんし、保育者の主体性や多様性が重視される現代において、「保育者とはこうあるべき」ということを明言することがためらわれるからなのかもしれません。しかし、そのような中では、自分なりにもっている「理想の保育者像」を「私の理想とする保育者とはこういうものだ」ときちんととらえ直し、「なぜ自分はこういう保育者を理想とするのか」と問い直すことはなかなかできません。今回、西本脩の記事を読むことが、私の中で暗黙のうちに築かれていた「理想の保育者像」を対象化し問い直すきっかけとなりました。いまでは当たり前になっていてあえて話題にされないことが、まだ新しいこと・議論すべきことであつた時代の文献を読むことのおもしろさがあると感じました。

創刊号から二〇〇七年までの『幼児の教育』を、TeaPotで見るができるようになりました。これまで限られた場所でしか読むことができなかった貴重な文献が、インターネットで簡単に検索できるようになったことを本当にありがたいと思います。と同時に、時代を経てちよつと茶色くなり、いまにも破れそうなページをそつとめくり、時代の重さを感じながら読む時と、パソコンの画面を通して読む時とでは、内容は同じでも感じることは違うような気がします。便利になってよかったなと思いつつ、あの緊張感の中で読む感じもよかったなと名残惜しいように思っています。

(金子 お茶太大学院)

注 ソビエト連邦が一九五七年に人類初の人工衛星「スプートニク1号」の打ち上げに成功したことで、米国が危機感をもつたことを指します。米国では、このことをきっかけに、科学技術の向上、学校教育の充実を目指し、「教育内容の現代化運動」と呼ばれる運動が起りました。